

ベトナム

「乳がん早期発見プロジェクト」の終了と現地移管

2010年11月から始まったベトナムでの「乳がん早期発見プロジェクト」が2015年12月に終了し、ベトナム ハノイ市で現地への事業移管の式典が開催されました。このプロジェクトは、横河商事株式会社様の『横河商事基金』の支援を受けた活動の一つで、式典には日本から同社の社長や取締役も出席されました。

乳がん早期発見プロジェクトは、2010年の開始当初はベトナム赤十字傘下のNPO団体CASCDとともに2年間活動を行いました。PHJからの支援は2012年に終了しましたが、現在もCASCDでは本プロジェクトを独自で実践しています。

その後2013年1月より会員数1,400万人のベトナム・ウィメンズ・ユニオン(VWU)からの強い要請により、さらに広範囲な活動を3年間実施しました。

この活動により、自己触診研修を普及するトレーナーが123名育成されました。さらにそのトレーナーから自己触診法を教わった女性の数は17,222人(目標15,000人)と目標を大幅に上回る結果となりました。なお、自己触診により異常が見つかった131名は全員病院で精密検査を受け、そのうち23名が乳がんと診断され、治療を受けました。

自己触診研修が想像以上に普及した要因は、VWUの支部が自発的な活動を進めたことにあります。今後VWU独自プロジェクトの一つとして継続すること



自己触診研修の様子

が約束され、自立支援のPHJとしては理想的な形で事業を現地移管できました。

今年1月にハノイで開催された「乳がん早期発見プロジェクト」の事業移管の式典は、ベトナムからVWUのグエン・ティ・タン・ホア代表、チャン・ティ・フン副代表ほか幹部職員が出席しました。日本からは横河商事様の横河惇社長、坂口均取締役、PHJのタイ事務所長ジラナン、本部の蓮見、塩田が出席しました。

式典で横河社長から「本活動のキーワードは、“草の根運動”であり、それを広く、深く、継続的に実施していただきたい」との言葉があり、それに対し

VWUのタン代表から「まったく同感であり、その精神を大切にこれからの活動に取り組んで行きたい」との力強い表明がありました。

今後、プロジェクト継続に有力な手段となる“乳房サンプル”50セットが横河社長から活動地域6か所のVWU各支部代表に贈呈され大きな拍手が寄せられました。VWU・横河商事・PHJ 3者の友好の絆をより強固なものにしたことで、ベトナム/日本両国の親善と信頼向上にもつながることを願います。

横河商事株式会社 坂口均取締役のコメント：

VWUという巨大組織と運よく出会え、パートナーとして組むことができたことがKey Success Factorであったと思います。ビジネスも、ボランティアも、やはり人との出会いがすべてを決めると感じました。その出会いを演出いただいたPHJ東京事務所とPHJタイ事務所に深く感謝申し上げます。

横河商事基金とは、2008年10月に横河商事株式会社創立70周年記念事業の一環として“社会貢献”を目的に設立されました。PHJはベトナムでのHIV/AIDS予防教育についても基金の支援を得て2008年から2年間ホーチミン医科薬科大学で活動を続け現地移管をしました。乳がん早期発見プロジェクトと、HIV/AIDS予防教育は、ともにPHJがタイで実施した活動を横展開したものです。

タイ事務所長 ジラナン・モンコンディ
東京事務所 塩田 勝雄、蓮見 雅彦



VWU本部での事業移管の式典(右から4番目 VWUタン代表、5番目横河惇社長、6番目 坂口均取締役)



メコン川にかかる「きずな橋」と川を生活に利用している住民たち

現在、PHJはカンボジアで「コンポンチャム州母と子のための地域保健システム強化事業」を行っています。私は2006年1月にこの地域を個人旅行したことがあります。お目当ては2001年に日本のODAで完成した「きずな橋」です。

カンボジアは国土がメコン川により東西に分断されており、メコン川に架かる橋はカンボジアの人たちから待望されていました。「きずな橋」によりカンボジアの主要幹線道路の一つである国道7号線はメコン川を渡り、首都のプノンペンとつながるようになりました。

現在、橋の周辺の土手は整備されていますが、2006年当時、川岸は土のままの土手となっており、近くには多くの家屋がありました。1月は乾季ですからメコンの水面は土手から10mほど下がったところにあります。しかし、雨期になると土手のすぐ近くまで水面は上昇するようです。「きずな橋」の橋脚は雨期の最高水位まで茶色に染まっています。

私が訪問したときはちょうど旧正月の時期でしたので爆竹や獅子舞でにぎやかでした。また、中国系の家にお呼ばれして旧正月のごちそうをいただいた楽しい思い出もあります。

私が旅行したトンレサップ湖からメコン水系にかけての地域にはコンポン〇〇という地名がいくつもあります。コンポン(Kampong)はサンスクリット語の「集まった状態」が語源であり、カンボジアでは「港」を意味しています。コンポンチャムは「チャム人の港」となります。

カンボジアの主要民族はクメール人ですが、少数民族としてチャム人が暮らしています。チャム人はクメール王朝の時代にベトナム南部を支配していたチャンパ王国の人々の末裔です。彼らはイスラム教徒であり、殺生を嫌う仏教徒の代わりに漁業で生計を立てることが多いようです。メコン川やトンレサップ湖周辺にはイスラム教徒の集落があり、PHJの活動地域にもあります。彼らと多数派の仏教徒との関係は良好であり、同じ地域で共生しています。

東京事務所 海外事業部カンボジア事業担当
桜小路 光紀

PHJはバンテン州セラン県ティルタヤサ自治区で、10年余り母子保健改善事業を実施してきました。2015年6月に現地への事業移管を終わりましたが、自治区の各村では引き続き月1回の無料妊婦健診及び妊婦教室を自治区主体で実施しています。(PHJはインドネシアでの活動分野を所管する省庁とMOU(了解覚書)を締結次第活動を開始します。)



妊婦教育の様子

昨年のスジュン村のポスケステス(助産診療センター)の利用状況や利用者の声を紹介します。村に駐在しているヤンティ助産師は、毎月妊婦健診及び妊婦、授乳中の母親

への母子保健教育を実施しています。2015年1月より10か月間に295名が妊婦健診を受け、そのうち25%が4回以上健診を受けました。健診参加率の増加により妊娠異常の早期発見を高め、妊婦教室参加率の増加が妊婦の妊娠・出産、育児に対する知識や意識を向上させています。ポスケステスでの出産件数は計10件(月平均1名)でした。伝統的産婆が補助的な役割で出産に立ち会い、助産師との良好な関係構築及び役割分担も確立されています。

又、妊婦・胎児の健康チェックに加え、一般診療でも

ポスケステス利用状況 2015年1月～10月

一般診療利用	妊婦健診(4回以上)	出産	伝統的産婆介助	搬送件数
227名	295(73)名	10件	0件	16件

227名の村人が利用し、一般的な病気の相談、家族計画の助言など包括的なサービスを提供する場となっています。ポスケステスで対応出来ない出産症例の、自治区診療所や病院への搬送件数は16件で、助産師と自治区診療所及び病院との連携で実施されました。

現在第1子妊娠中のヌロさん(23歳)はボランティアの勧めで妊婦教室に参加し、妊婦健診を受けており、「ポスケステスは、自宅から近く、設備も整って快適です。ヤンティ助産師がいつも居るので、何かあってもすぐに診てもらえます。妊婦教室は、他の妊婦さんと一緒に学べるのがとても良いです」と述べています。

第2子を出産されたニハエさん(32歳)は、「家から近く、設備も整っているし、ヤンティ助産師が自宅まで往診診察に来てくれますので、家族と相談して出産場所に決めました。出産までこまめに診察してくれて安心でした」と話してくれました。



ニハエさんと子供

インドネシア事務所長 柳瀬 美子



助産診療所建築の様子

離れた街の中心にある医療施設での出産が大部分を占めており、特に自宅での出産は衛生面では決して安全とは言えない環境で行われているのが現状です。

このような状況のもとに、PHJ ミャンマー事務所は、地域の女性が安全に出産できるように、タッコン郡のアレージョン村、カンター村の2村において助産診療所を建築することを決めました。この建築を開始するために、昨年の7月から、担当省庁である保健省とネピドーカウンシルからタッコン郡での医療施設建築の許可を得るべく、担当者との交渉を進めてきました。この過程で、昨年11月に行われた総選挙の影響もあり、ミャンマー政府機関との交渉の難しさや、行政効率の悪さを感じるが多々ありましたが、11月中旬に何とか許可が下り、建築を開始しました。

ミャンマーの農村部では、医療施設がない地域がまだまだ多くあります。PHJの支援対象であるタッコン郡の農村部でも、自宅での出産もしくは地域から遠く

2村での建築が始まってからは、ミャンマー事務所の現地スタッフと共に、建築現場を定期的に訪問し、実際の建築物および建築会社の進捗状況を管理してきました。進捗管理の過程では、現場での工程管理における時間の感覚の違い、段取り方法の違いなど、かなりのギャップを感じるがありました。特に、作業工程を管理する上では、建築会社のスケジュール管理の曖昧さに苦勞する場面も多く、納期を間に合わせる為に建築会社と打ち合わせを繰り返しながら、3月中の完成を目指して、現場の管理を進めてきました。

このようにあらゆる物事が先進国のようにスムーズに進まないミャンマーでは、生活に必要なインフラがいまだ整っていません。そのため、今後もPHJ ミャンマー事務所は、プロジェクト対象地であるタッコン郡への医療施設建設支援を継続していきたいと考えています。皆様からのご支援をお願いいたします。



完成間近の助産診療所

ミャンマー事務所長 真貝 祐一

東日本大震災復興支援(気仙沼)

東日本大震災が発生して5年が経ちました。PHJは発生直後から支援活動を開始し、これまでに個人・団体から多くの義援金や物品寄付をいただき、合計3億円以上の支援活動ができました。

気仙沼支援について報告します。今年度は第5次支援として気仙沼市医師会を通して、15の医療機関に什器類や事務用機器を納入しました。PHJは第1次～5次まで総額約4700万円の機器類を購入し、寄贈しました。災害募金額は年々減ってきておりますが、現在も某IT企業からIT教育費の一部を災害支援としてPHJへ定期的にご寄付をいただいております。この企業は震災発生直後に会社役員一同で現地を訪れ、気仙沼の惨状を視察されました。このように会社全体で今でも被災地に支援の手を差し伸べておられる現状に、私たちは大変感動し、勇気をいただいております。

この5年間の活動をとおして新しいドナーが増え、

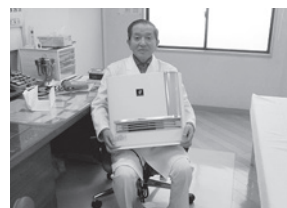
海外の支援事業にもご賛同をいただき感謝しております。

現在の気仙沼湾の周りは殆ど震災前と同じように道路も整備され、港や魚市場も活気を取り戻しておりますが、市民の暮らしはまだ復興途上のようなようです。立派な災害公営住宅はあちこちに建ちましたが、特にお年寄りにとって5年間暮らした仮設から公営住宅への転居は健康上や買い物等生活面での不便さ等で順調ではないようです。また長期にわたる仮設住宅暮らしの中には認知症やアルコール依存症の方が増えており、これからはリハビリや心のケアに関わる総括的支援が必要と言われております。PHJは医師会の先生方と相談しながらこれからも活動を続けて行きます。

東京事務所 横尾 勝

2011年3月15日から2015年12月31日までの
東日本大震災寄付金の収支

		単位(万円)
収入	現金寄付	13,896
	物品寄付(医療機器・事務機等)	20,677
支出	医師派遣費・医療機器調達費	10,860
	物品支援(医療機器・事務機等)	20,677
	輸送費・スタッフ活動費	2,685
残額	復興支援に使う予定	351



加湿セラミックファンヒーター
(三条小児科医院)



カラーレーザー複写機
(小松クリニック医院)

「これから」

こんにちは。PHJで3か月間、インターンとして働かせて頂いた荒川久美です。

私は夢をもって今の大学に進学したのですが、大学生活の中でその漠然とした思いに自信がもてなくなり、そこから自分なりにいろいろなことに挑戦していくようになりました。

サークルで行っていたHIV/AIDSに関する活動はその1つであり、その活動を通してPHJのことを知りました。青少年に対するHIVの予防活動を行っているチェンマイの事務所実際に訪問させて頂いて、活動について詳細に教えて頂きました。

HIV/AIDSの問題の根はとても深く、国の文化や対策によって様々な形を見せています。発展途上国では特に大きな問題として扱われていますが、先進国も例外ではなく、日本でも年々感染者は増加しています。しかし、日本の多くの方は、そのことを知らず無関心なままです。タイでPHJの活動を知ったことがきっかけで日本でのPHJの活動を通して少しでもHIV/AIDSの現状、事実を知ってもらい、支援の糸口を作っていくことに関わらせて頂きたいと思ったことから、インターンとして働かせて頂くことになりました。

PHJでは主にタイのHIV/AIDSの事業について関わらせて頂き、エイズ学会に向けての資料作りを行って実際に学会にもPHJスタッフの1人として参加させて頂きました。また、グローバルフェスタでの広報活動やインドネシアの栄養事業の資料作りなど

慶應義塾大学看護医療学部4年 荒川久美

多くのやりがいのある仕事を任せて頂き、充実した3か月間でした。スタッフの皆さんはこれまでに様々な経験を積まれてきているので、そんな皆さんと働くことはまだ社会人経験の無い私にとって学びが多く、刺激的でした。

大学生活を振り返ってみると、PHJの活動も含め、多くの経験を経て自分の将来について具体的に考え、将来の夢を確固たるものにすることができたと思います。家族や大学の友人や先輩、先生はもちろんのこと、活動の中で出会った多くの人の支えが無ければここまで頑張ることはできなかったと思います。

支えてくれた人たちの期待に応えられる様に、これからは1人の看護師として専門性を生かして夢に向かって頑張っていきたいと思います。

(2016年4月からは母校の大学病院で看護師として勤務しています。)



インターン修了式にPHJのスタッフと記念撮影

「アジアの動物カレンダー2016」募金と年末募金の報告

2015年10月1日に募金を開始しました。2016年1月5日までに年末募金と合わせて346万円が集まりました。皆様のあたたかいご寄付に感謝いたします。

2016年のカレンダーのテーマは「アジアの動物の親子」でした。大好きな動物の親子をカンボジア、タイ、武蔵野市の子供たちが生き生きと描いてくれました。皆様にもご好評をいただき、1月初めに申し込みを終了いたしました。

2017年のカレンダーのテーマは干支の動物です。こちらの準備も開始しております。



カンボジアの小学校の子供が絵を描いているところ



タイの子供が絵を描いているところ

● 20周年記念誌とホープニュース77号 ●

PHJは2017年1月に創立20年を迎えます。2016年8月に開催される第19回通常総会と第21回通常理事会で20周年記念誌を配布する予定で制作を進めております。賛助会員の皆様にはこの記念誌を8月末に郵送いたします。どうぞ楽しみに！

次号のホープ・ジャパン・ニュース(77号)は2016年10月に発行いたしますのでご了承ください。

お知らせ

*ホープジャパンニュースを郵送でなく、PDFでお受け取りになりたい方は info@ph-japan.org までお申し込みください。次号よりメールに添付してお送りいたします。